

## 編集後記

ロシア軍によるウクライナ侵攻は、子どもや学校教育にも大きな影響を及ぼしています。2020年8月17日の西日本新聞の社会教育欄には『戦争は“おとぎ話”』実感ない学生も…揺れる平和学習、現場の模索』との記事が載りましたが、2022年には「戦争は“おとぎ話”」ではなくなってしまいました。戦争体験者が減り、若者への語り継ぎが課題となる中、学校現場は平和学習にどう取り組むか模索していましたが、もはや戦争は、ライブな報道と地政学的な環境によって、リアルに迫り来る危機であると認識されるようになりました。

2022年8月7日の東京新聞「サンデー版 世界と日本 大図解シリーズ難民・国内避難民」はトピックを年表形式にし、「ロシアのウクライナ侵攻やミャンマーの軍事クーデターなど、21世紀になっても紛争と迫害は絶えません。こうした紛争で強制的に家を追われた人は2021年末で8930万人にもなります。しかもロシアの侵攻でウクライナからの難民・国内避難民が急増し、世界で家を追われた人は22年5月には1億人を超えました。なくならない紛争と難民などの悲劇はいつ終わるのでしょうか」と平和には程遠い状況を伝えました。うち約4割が子どもだと推定され、家族や故郷との辛い別れは、幼い身心を深く傷めます。国際連合広報センターのニュース・プレス「戦争と子どもたち」は「戦争が子どもの発達におよぼす影響」を報告していますが、生命維持に必要な「保健と栄養」さえ不安な状態です。

また、家族や故郷と別れずとも、占領され言語権を奪われると、学校の授業でも母語ではなく、占領国の言語を強制されます。ラジウムを発見した科学者『キュリー夫人』の伝記に、1871年頃のワルシャワがロシアに併合され、母語のポーランド語ではなく、ロシア語での学習を強制された場面が出てきます。ロシア人の査察官来訪で教室に緊張が走ります。査察官の質問に優秀なマーニャがロシア語で応答しますが、多感な少女は屈辱の涙を流します。母語は民族の生活や意識の基盤として、国民国家形成の要であることが知られる逸話です。

今号は、こども学科6件、スポーツ学科3件、合計9件の投稿がありました。  
どうぞ高覧ご批評くださいますよう、宜しく願い申し上げます。

2022年9月吉日  
編集委員長  
馬場 治

《投稿された論文等に関する著作権は、基本的に人間科学部に帰属します》  
「金沢星稜大学学会 会則と規程等」については、下記のWEBサイトをご覧ください。

<http://www.seiryu-u.ac.jp/u/education/gakkai/research02.html>